

「17年目の秘密」

第1話 「今を生きる8人」

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

谷島

春樹 (17)
夏希 (20)

中央高校全日制二年生
姉、派遣OL

高崎

倫子 (17)
優一 (26)

専業主婦
夫、レストラン店員

山岸

利枝子 (17)

中央高校全日制二年生

宮田

真由子 (17)
真実 (0)

未婚の母
娘、赤ん坊

藤原

亮 (17)

中央高校全日制二年生

川村

浩輔 (17)

中央高校定時制二年生

牧

和哉 (17)
貴幸 (48)

滝雀学園高校二年生
父、不動産会社社長

永井

聡実 (17)

母、不動産会社副社長

松野

亜沙美 (17)
明 (31)

中央高校全日制教師

同級生

〃

〃

剛士 (17)
奈々 (17)

中央高校全日制二年生
中央高校全日制二年生

寺沢

隆三 (47)

喫茶店店長

1 朝の道

夏。蝉の音が響いている――。
制服姿の谷島春樹（17）が、自転車を
こいで、郊外の駅前を走っている。

2 中央高校・校門

自転車通学の生徒や、徒歩通学の生徒
たちが、次々に登校していく。
その中に、春樹の姿もある。

3 同・二年A組教室

生徒たちが、勉強をしたり、本を読ん
だり、数人のグループになって井戸端
会議をしたりしている。
春樹の友人・山岸利枝子（17）が、眠
そうな顔で何度もあくびをしている。
と、クラスメイトの亜沙美（17）、剛士
（17）、奈々（17）が利枝子の席まで
やってくる。

亜沙美「おはよう、利枝子」

利枝子「(あくびをしながら) おはよう」

剛士「また昨日も手伝ってたのか」

利枝子「まあね」

奈々「利枝子のお母さんもひどいよね。自分のスナックの人手が足りないからって、利枝子を手伝わせるなんてさ」

利枝子「手伝わなかったら手伝わなかったで、あとになって文句言われるんだもん、素直に言うこと聞かないと、返って面倒なことになるんだから」

剛士「けど、スナックの手伝いも大変だろ。

特に煙草臭とかさ。俺、街で煙草の臭い嗅ぐと、頭痛くなつてさ」

奈々「分かる、私もそうだもん。(と利枝子に) よく耐えられるよね」

利枝子「慣れだよ、慣れ(とまたあくびをする)」

と、春樹が登校してくる。

春樹「おっはよう」

剛士「お、来たな。我らがリーダー・春樹が

(と笑う)

春樹「その言い方はやめてって言ったでしょ。クラス委員だからって、リーダーらしいことなんてやってないんだから。俺のほうが、みんなに助けられてるんだから。感謝しますよ」

利枝子「何言ってるの。いつも、クラスのこと気にしてくれてるじゃない。中学校のときから、そういうとこ変わってないんだから」

剛士「さすがは利枝子だ。去年知り合ったばかりの俺たちとは違うな。春樹のこと、よく見てるよ」

利枝子「当たり前でしょ」

春樹、あたりを見回す。

亜沙美「どうしたの？」

春樹「いや、亮君の姿が見えないなあと思つて。また遅刻かな」

利枝子「今に始まったわけじゃないでしょ、亮君の遅刻は」

春樹「もしこれで遅刻したら、今日で十三回目だよ。ゴールデンウィーク明けからの十二回の記録更新するよ」

奈々「（感心するように）よく覚えてるね」

春樹「亮君のことはね、嫌でも頭に残るの。

小学校一年からの仲だからね。昔から、亮君は遅刻の常習犯で、やんちゃでいたずらっ子だから、よく先生にも怒られてたけど、やっぱり一番怒られてた理由は、遅刻したことかな」

利枝子「多分、そうだろうねえ。私の記憶の中では、亮君は遅刻して先生に怒られるのが、日課みたいになってたからね」

春樹「確かに、そうだったね」

剛士「うらやましいな。そうやってお互いのことをわかってる友達がいるなんてさ。俺の友達なんて、みんな進学校に行って、まるで別世界の人間みたいになっちゃったんだから。俺だけ、なんだか置いてきぼりくらったみたいでさ。一人孤独の中にいま

すよ」

春樹「そんな悲しいこと言わないでよ。今の剛士には、俺たちがいるでしょ。寂しい思いなんてさせないよ。俺だって、剛士に助けられることだってあるんだから、もつとポジティブにいかないと」

剛士「あざっす。リーダー」

微笑む春樹。

と、チャイムが鳴り、担任・松野明（31）が入ってくる。

それぞれ、自席に戻っていく生徒たち。

春樹「起立」

立ち上がる生徒たち。

と、勢いよくドアが開いて、藤原亮（17）が入ってくる。

亮「ギリギリセーフ！」

松野「アウトに決まってるだろ。チャイムが鳴った段階で教室にいないとアウトなんだから」

亮「マジかよ。今日は間に合ったと思ったの

になあ」

と、残念そうに席につく。

春樹「亮君。これで、連続十三回目の遅刻だよ。新記録だよ」

亮「マジ？　ありがとうございます」

松野「（亮に）何があるがとうだ。遅刻で記録作るなんて、気が緩んでる証拠だ。あと二回遅刻したら、生徒指導部で反省文書かされるぞ」

亮「嫌！　反省文なんて無理だし」

松野「だったらもつと早く来るようにしないと。遅刻は、進路にも影響するんだからな」

亮「（渋々）はい」

お互いの顔を見て笑いあう春樹と利枝子。

4 マンション・高崎家・ダイニング

三LDKの造りで、掃除も行き届いており、整理整頓がしっかりされている。

高崎倫子（17）が、ソファアで横にな

っている――その顔は、とても寂しい顔をしている。

ゆつくりと起き上がり、洗面所へ行く。

5 同・同・洗面所

鏡に背中を映し、映った背中を見る倫子――背中のあるこちらには、青痣ができています。

大きなため息をつく倫子。

6 中央高校・二年A組教室

昼ごはんを食べている生徒たち。

春樹、利枝子、亮、亜沙美、剛士、奈々も机を合わせてそれぞれ弁当や購買のパンを食べている。

亮「あと二回で反省文かぁ。考えたらぞつとするな」

春樹「それだったら、早起きして一番に教室に入るつもりにもなったら。怠けすぎなんだよ、亮君は」

亮「そんな冷たい言い方ないだろ。少しは心配してくれたって……」

春樹「心配しても効果がないから、心配しないの」

不機嫌な顔の亮。

と、利枝子の携帯電話が鳴る。

利枝子「はい、もしもし」

と、廊下に出ていく。

亜沙美「誰だろう？」

剛士「さあ」

と、廊下から利枝子の大きな声が聞こえる。

利枝子の声「え！ 本当ですか？」

生徒たち、いぶかしそうに廊下を見る。

春樹と亮、不思議そうに互いの顔を見合う。

7 同・廊下

利枝子が携帯電話で話している。

利枝子「（携帯に）それは良かったですねえ」

と、春樹と亮がやってくると、利枝子の様子をうかがっている。

利枝子「（携帯に）はい、そうですか。わかりました、近いうちに行きます」

と、電話を切る。

春樹「どうしたの？」

利枝子「真由子のお父さんから。真由子、無事に女の子産んだって」

春樹「……」

亮「（嬉しそうに）本当か？」

利枝子「うん！ 母子ともに無事だって」

亮「そうか、やったな！」

利枝子「やったよ！」

と、ハグをする利枝子と亮。

複雑な表情の春樹。

タイトル

『第1話 今を生きる8人』

生徒たちが帰宅している。

定時制の生徒たちが、登校していく。

春樹が、作業着姿の川村浩輔（17）と

話している。

浩輔「そうか。真由子、無事に産まれたんだ」

春樹「うん……」

浩輔「どうしたの？」

春樹「ほら、俺、真由子が妊娠したときに、

何の手助けもしない、見舞いにも行かない

って言って、この半年、疎遠になってたで

しよ。だから、無事に産んだことは嬉しい

と思ってるけど、なんか真由子と顔合わせ

づらいつて言うか……」

浩輔「そうだったなあ……。俺は、真由子と

は小学校から一緒だったから、時々時間が

あれば見舞いに行ってたけどな」

春樹「何かの勢いで、見舞いになんて行かな

いって言って、啖呵切っちゃったからさあ

……」

浩輔「でも、真由子は春樹に来てほしがって

たよ」

春樹「え……？」

浩輔「いくら中学校の三年間だけとは言っても、真由子は春樹のこと、大事な友達だと思っただよ」

春樹「……」

浩輔「倫子でも誘って一緒に行けば良いんだよ。そうすれば、真由子だって喜ぶだし、倫子と一緒になら、春樹だって少しは心強くなるだろ」

春樹「そうだね」

笑顔になっている春樹。

9 アパート・谷島家・玄関

一Kの古い木造アパート。

春樹が、靴から鍵を取りだし、ドアを開けようとする。

と、先にドアが開き、姉・夏希（20）が出かける支度をして、出てくる。

夏希「あ、お帰り」

春樹「ただいま。今から出かけるの？」

夏希「うん。すぐに来てくれてって電話があつて……。今日は、多分遅くなる。もしかしたら、会社で泊まってくるかもしれない。晩御飯作つといたから、適当に温めて食べて」

春樹「派遣とは言っても、OLも楽じゃないね」

夏希「まあね、じゃあ行ってきます」

春樹「行ってらっしゃい」

と、中に入っていく。

10 同・同・居間

春樹、鞆から求人雑誌を取り出すと、眼鏡をかけて、読み始める。

11 マンション・高崎家・玄関（数日後・夕）

春樹がやってくる——インターホンを鳴らす。
と、倫子の声がする。

倫子の声「はい？」

春樹「倫子？ 俺、春樹」

倫子の声「すぐ開けるね」

12 同・同・ダイニング

部屋を見渡している春樹。

倫子が、お茶を持ってくる。

倫子「どうしたの？」

春樹「いやあ、きれいにしてるんだと思って。

せつかく寮もある高校に入学したと思っ

たら、その高校をやめて、バイト先のレス

トランの先輩と結婚するって言ったとき、

何をふざけたこと言ってるんだと思って

たけど、こうして見ると、何とか上手くや

ってるみたいだね」

倫子「だって、法律上女は十六歳で結婚でき

るんだもん。おかげで、四月生まれの私は、

順調に六月に籍入れることができたから」

春樹「入学してたった一ヶ月で辞めて、交際

一ヶ月ですぐに結婚して、一年前の今頃は、

本当に驚かされたんだからね」

倫子「結局高校入ったって、いずれ結婚したら学歴なんて関係なくなるんだもん。でも、今春樹の気持ち考えたら、驚くのも無理ないのかもね（と笑う）」

春樹「当たり前でしょ。でも、安心した。ちやんと、主婦業やってるみたいで」

倫子「ありがとう……春樹」

春樹「何が？」

倫子「私のこと、心配してくれて」

春樹「……？」

倫子「私が結婚したら、もうすっかり他人になっちゃったのかと思ってたから、嬉しいの……」

春樹「俺たちは、同じ養護施設で同じ生活を送ってきた家族なんだよ。血がつながって
いない赤の他人でも、俺は倫子のこと、大切な家族だって思ってる。お互い、複雑な事情で施設に入ったんだから」

倫子「……」

春樹「確かに、俺は両親の正体が分からずに、産まれてすぐに姉ちゃんと預けられた。でも、もし養護施設に入ってなかったら、倫子とは会わなかったかもしれないでしょ」

倫子「そうだよね……。私だって、養護施設に入った五歳のときから、春樹と一緒にだった。父親の一家心中で、私だけが生き残ってなかったら、養護施設に入ることもなかったし、春樹と会うこともなかったんだもんね。これも運命なのかな」

春樹「そうだよ。家族がいない者同士で、偶然同じ養護施設で育ったのも、何かの縁。だから、俺にとって、倫子は大切な家族。そのこと、忘れないですよ。うちの姉ちゃんだって、そう思ってるんだから」

倫子「ありがとう……」

春樹「（微笑むと）あ、大事なこと言うの忘れてた。こんなこと言いに来たんじゃなかったんだ」

倫子「何？」

春樹「聞いたと思うけど、真由子が、無事に女の子産んだんだったよ」

倫子「ああ、利枝子から聞いたよ」

春樹「だから、もし良かったら、一緒に真由子の見舞いにでも行こうと思って」

倫子「春樹……？」

春樹「確かに、俺は真由子の出産に反対したけど、浩輔の話では、真由子は、俺にも見舞いに来てほしかったって言ってたみたいなの。だから、ちゃんと真由子に『おめでとう』って、言ってあげたくて……」

倫子「そっか。春樹が、そんな気持ちになったのなら良かった」

春樹「当時は反対してたけど、今は純粋に俺も嬉しいって思ってる。半年も疎遠になってたからこそ、今になってちゃんと真由子の顔を見たいんだよ」

倫子「そういう理由だったら、私も一緒に行く。もし気まづくなったら嫌だもんね。そこは、私に任せといて」

春樹「ありがとう、倫子。本当に助かる」

微笑む倫子。

と、玄関のドアが開き、倫子の夫・優

一（26）が帰ってくる。

倫子「お帰り」

春樹「（優一を見て）お邪魔してます」

優一「いやあ、いらっしやい」

春樹「（二人を見て）俺、そろそろ帰るね。

晩御飯の支度もしなきゃいけないだろう

し」

と、立ち上がる。

倫子「（慌てて）そんなこと言わずに、もう

少しいても良いんだから」

春樹「だって、あんまり二人の時間を邪魔し

ちゃあ悪いし」

優一「そうだぞ、倫子。春樹君だって、俺た

ちに気を遣ってくれてるんだ。引き止めた

ら可哀想だよ」

倫子「……」

春樹「じゃあね」

倫子「また……来てくれるよね？」

春樹「うん。また来るから。真由子のこと、今度連絡するから。それじゃあね」

と、手をふって去っていく。

寂しい顔になる倫子。

玄関へと向かう優一。

13 同・同・玄関

ドアを開け、春樹の姿がないことを確認する優一。

ドアを閉めると、鍵をかける。

14 同・同・リビング

優一が戻ってくる。

倫子が、夕飯の支度を始めようとしている。
いる。

倫子「すぐ、ご飯の支度するから」

優一、倫子の腕をつかむ。

倫子「(怯えて) 何……？」

優一、何も答えず、倫子を連れ出して

いく。

15 同・同・寝室

優一、ドアを開けて入ると、倫子をベツドに引き倒す。

倫子に馬乗りになって、顔を殴る優一。

優一「あの男に何言ったんだ」

倫子「何も言っていない……。ただ、真由子が無事に出産したから、一緒に病院に行こうって……」

優一、倫子の首を絞めて、

優一「ほんとにそれだけか？」

倫子「(苦しみながら) ほんとだって……」

と、思い切りむせる。

優一「余計なこと言ったらどうなるか、分かってるだろうな」

倫子「誰にも言うわけないでしょ、こんなこと……」

優一、倫子から離れると、冷たい視線を向けて、

優一「欠陥品が」

と捨て台詞を言うとは出ていく。
いつまでも、めそめそと泣き続けてい
る倫子。

16 中央高校・男子トイレ

春樹、亮、剛士が話している。

剛士「バイト始めるの？」

春樹「うん。もう高校生活も一年以上経って
慣れてきたし、この辺で良いところ見つけ
たから。そこ、通勤も便利だし」

亮「どこでやるんだ？」

春樹「この近くに最近できた小さい喫茶店あ
るでしょ。ほら、前まで貸店舗で空き家
なあって、ずっと工事してたでしょ」

亮「ああ、あそこか」

春樹「学校帰りにも行けるし、休日バイトも
学校に行くのと通勤時間も大して変わら
ないから良いかなと思って」

剛士「なるほど、しっかり考えてるね」

春樹「姉弟二人で古いアパートで暮らしているのも楽じゃないからね」

亮「……」

春樹「別に、貧乏が嫌なわけじゃないんだよ。ただ、少しでも生活を楽にできたらと思っ
てさ」

剛士「春樹ならできるよ。クラス委員やっ
てるんだし、人との接し方にも慣れてる。絶
対店の人気者になるよ」

春樹「(笑って) そうだと良いけどね」

17 マンション・高崎家・寝室(数日後)

倫子が、化粧をしている——口元の傷
跡や痣を、必死に消している。

18 総合病院・廊下

春樹がソファーに座っている。

と、倫子がやってくる——春樹の肩を
叩く。
気が付く春樹。

微笑んでいる倫子。

春樹「ありがとう、来てくれて。倫子が来る前に、一人で行こうって思ったんだけど、やっぱりね……（とうつぶく）」

倫子「そっか……」

19 同・廊下く病室

春樹と倫子がやってくる。

倫子「ちよつと待っててね」

と、部屋をノックし、ドアを開ける。

ベッドで横になっている宮田真由子

（17）と、見舞いにきていた牧和哉（17）

と永井聡実（17）が、倫子を見る。

聡実「倫子ッ」

倫子「見舞いに来たよ。（と真由子に）真由子、おめでとう。頑張ったね」

真由子「ありがとう。これで、あと春樹も来てくれたら、中学時代の仲良し八人組みみな来てくれることになったのに、やっぱり来てくれないんだ……」

険しい顔で見合う和哉と聡実。

倫子「真由子」

真由子「……？」

倫子「今日は、もう一人見舞いに来てるの」

と、ドアを開けて、春樹の手を引き、
連れてくる。

春樹「……」

真由子「……」

和哉と聡実「春樹ッ」

春樹、笑顔を作つて、

春樹「真由子、おめでとう。ごめんね、半年

も見舞いにも来なくて……」

真由子「……」

春樹「あの時は思いつきり反対して、見舞い
に来ないって断言した以上、来ようと思っ
ても来れなくて、正直、真由子の状態はど
うなってるんだろうって、心配だった」

真由子「……」

春樹「でも今は、無事に赤ちゃんを産んでく
れて良かったって思ってる。本当に、おめ

でとう」

和哉「（真由子に）良かったじゃないか、ちやんと春樹も来てくれて。これで、念願叶ったじゃないか」

真由子「（微笑んで）うん。（と春樹に）ありがとう、春樹。これで、やっと前向きになつて、子育てに専念できる」

聡実「ねえ、子どもの名前、考えたの？」

倫子「私も知りたい」

真由子「うん、考えたよ」

と、引出しから、筆ペンで『真実』と書かれた画用紙を取り出す。

真由子「『真実』って名づけたの」

和哉「真実か……」

春樹「由来は？」

真由子「『真実』の『真』は、私の名前からで、『真実』の『実』は、聡実の『実』をもらったの」

聡実「私の……？ どうして？」

真由子「私が妊娠したことが分かったとき、

みんなは最初、妻子がいる男の血が入って
る子どもなんて産むべきじゃない、認知さ
れなかったら真由子の人生がめっちゃめち
やになるって、反対したでしょ。特に春樹
は、猛反対したじゃない。人の道に外れた
ようなことをした奴の手助けなんかする
つもりはないって」

春樹「そうだったね……」

真由子「けど、聡実はすぐに賛成してくれた。
せつかく宿った命だし、世の中には妊娠で
きない人もいるんだから、妊娠できる真由
子は幸せ者だ、産むべきだって言ってくれ
たでしょ。いつも見舞いにも来てくれた。
高校辞めてまで、真実を産むことができた
のは、聡実のおかげだと思ってるの。だか
ら、どうしても聡実に恩返しがしたくて」

聡実「真由子……」

と、真由子を抱きしめる。

聡実「ありがとう、そんな風に思ってくれて
……。私、すっごく嬉しい」

倫子「真面目な聡実の気持ちだが、真由子に伝わったんだよ」

春樹「中学時代生徒会長やってた人は、やっぱり真面目人間なんだね。反対も否定もしない、ただ一つの尊い命を大事にすることを最優先に考えたんだ」

和哉「そうだ。みんなでお祝いでもするか。真由子が退院するころに、退院祝いと出産祝いを兼ねてさ」

倫子「良いね、それ」

春樹「賛成ッ」

聡実「どこでやるうか？」

和哉「俺の家で良いよ。親も、どうせ仕事でいないだろうから、気を遣う相手もないし」

真由子「でも、そんなの悪いよ……」

春樹「こういうときじゃないと、八人全員揃うことなんてないんだから。和哉だって、嬉しいんだよ。(と和哉に) ねえ」

和哉「まあな(と苦笑する)」

倫子「それに、和哉の部屋は広いからぴった
りだよ。一人っ子で不動産会社の社長の御
曹司だから、大事にされて、お坊ちゃま暮
らししてるんだから」

和哉「（苦笑して）仕事優先で、大事にされ
てるなんて思ったことないけどね。欲しい
ものを買ってあげてるから、大事にしても
らってるって思ってほしいみたいだけど、
その手には乗らないんだから」

春樹「和哉も、幸せそうに見えて、やっぱり
それなりに親への不満もあるんだ」

和哉「当たり前前だろ。だから、今を幸せそう
に生きてる春樹と倫子が羨ましいよ」

倫子「……」

春樹「まあ、俺は俺で、姉ちゃんと姉弟で仲
良くやってるから」

倫子「私も……夫婦円満にやってるから」

真由子「例え母親一人でも、私、真実を立派
に育ててく。子どもに悲しい思いなんてさ
せない。大切に育てるッ」

笑顔で頷く春樹。

20 牧家・居間く台所（数日後・朝）

高級住宅街の中にある和風建築の木造
二階建て。

縁側で、和哉の父・貴幸（48）がスト
レッチャをしている。

台所では、和哉の母・淑子（45）が朝
食の支度をしている。

淑子「あなた、早く朝ごはん済ませないと会
議遅れますよ。今日は、常務も専務も出席
されるんです。私だって、すぐに行かない
といけないんですからね」

貴幸「少しぐらいのんびりしたって良いだろ
う。会社の幹部が集まる会議が、どれほど
神経使うか、お前だって副社長なら分かる
だろう」

と、台所までやってくる。

淑子「そんな甘いこと言ってはられないん
です。厳しくやってかないと、いつか痛い

目に遭いますよ」

貴幸「……」

淑子「“牧不動産”は、あなたのおじいさまの代から続いでるんですよ。海外にも拠点を置くつもりで、幹部たちだって動いてるんです。あなたがその気にならないと、社員たちだってついてきませんよ」

面白くない顔の貴幸。

淑子「ほら、もう食べますよ。（と席に着くと）いただきます」

と、朝食を食べ始める。

淑子「あなたも早く召し上がらないと」

貴幸、渋々座ると、

貴幸「いただきます（と食べ始める）」

と、和哉が起床してくる。

和哉「おはよう」

貴幸「おはよう」

淑子「おはよう。私たち仕事で先に出かけるから。遅くなるかもしれないから、晩御飯はコンビニの弁当なりカップ麺なり買っ

て食べなさい。あ、お小遣い足りてる？」

和哉「ああ」

淑子「なら良いわね。けど、無理に節約しなくても良いのよ。本当に足りなくなったら言いなさい。いくらでも渡してあげるから」

和哉「母さん、実は、今度友達を何人か呼ぶつもりなんだけど、良い？」

淑子「良いわよ。何人呼ぶか知らないけど、あまり羽目を外さないようにね」

和哉「……」

淑子「和哉は、大事な後継者だから、人の道に外れるようなことだけはしてほしくないの。だから、友達付き合いも考えるのね。もう子どもじゃないんだから」

和哉「顔洗ってこよ」

と、少々不機嫌そうに去っていく。

貴幸「何もあんな角の立つような言い方することないだろ。和哉だって、若いうちはいろいろな友達と付き合って、楽しもうとしてるんだから。今のうちにそんなこと言っ

たら、今に会社継がないとも言いかねないぞ。どうなっても知らんからな」

平然と朝食を食べている淑子。

21 アパート・谷島家・居間

春樹が、学校に行く支度をしている。

と、玄関のドアが開く音が聞こえ、夏希が帰宅する。

夏希「ただいま」

春樹「お帰り。最近、朝帰り多いね。派遣でも、そんなにこき使われるの？」

夏希「会社にとって、若者は戦力だからね。若いからっていう理由で、重宝されて、思いつきり働かされるの」

春樹「お酒臭いけど、帰り、どっかで飲んできた？」

夏希「うん。やっとそれなりに仕事が片付いたから、みんなでちょっと飲んできたの」

春樹「じゃあ、今日は休むの？」

夏希「そのつもり」

春樹「そつか、まあ無理しないでね。姉ちゃんが無理しなくても、俺も今日からバイト始まるから、バイト料が入れば、少しは姉ちゃんも楽できると思うよ」

夏希「（微笑んで）ありがとう」

春樹「じゃあ、行ってきます」

夏希「行ってらっしゃい」

2 2 喫茶店「エテ・プランタン」・全景（夜）

2 3 同・店内

春樹が、キッチンの後片付けをしている。

店長・寺沢隆三（47）が、売上の計算をしている。

寺沢「春樹君、もうそろそろあがりなさい。あまり遅く帰ると、お姉さん、心配するだろ」

春樹「もう終わります。これが終わったら、すぐに失礼しますから」

寺沢「頼りになるね、春樹君は。まだ、この店がオープンして一週間しか経ってないけど、それなりにお客さんも来てくださってるし、今日も、何度かお客さんが春樹君のことを褒めてくださったよ」

春樹「僕のことをですか？」

寺沢「ああ。笑顔が素敵だとか、サービスが行き届いているとかって。良い店員を見つけてましたねって、鼻が高かったよ、おかげで」

春樹「いえ、そんなことは。両親がいなくて施設にいたときから、職員さんの手伝いをしたり、みんなでご飯の支度したり、小さい子の面倒も見てきました。多分、そういう経験があったからだと思います。けど、バイトなんて初めてですから、まだこれから、店長にはいろいろとご迷惑をおかけしますが、よろしく願います」

寺沢「こちらこそ、頼りにしてるよ」

春樹「では、今日はこれで。お先に失礼しま

す」

寺沢「お疲れさま」

春樹、笑顔を見せ、頭を下げると、出ていく。

24 アパート・表

自転車に乗った春樹が帰宅し、自転車を止める——部屋の電気がついていないので、訝しそうな顔をしている。

25 同・谷島家・玄関く居間

春樹、入る。

春樹「ただいま」

と、電気をつける——誰の姿もない。

春樹「(呟くように)どこ行ったんだろ……」

呆然と立っている春樹。

26 ファーストフード店(数日後)

和哉と聡実が、ハンバーガーを食べている。

和哉「(ため息をついて)明日から学校かあ。

休日なんてあつという間だな。せつかくの
土日ぐらい、家でゆっくりしたいさ」

聡実「そんな言い方しなくても良いじゃん：
。今日行って良かったじゃない、真由子
の退院の日付が分かったんだもん。真由子
の退院と真実ちゃんの誕生のお祝い、やつ
とできるんだよ」

和哉「まあな。来週退院だから、誰かが真由
子の迎え行って、そのまま俺の家に来れば
良いだろ」

聡実「私が行く。きっと、真由子のお父さん
も、患者さん相手だから、忙しいと思うし」

和哉「そうだよな……。真由子、同じ病院に
お父さんがいるのに、結局誰にも支えられ
ずに、一人で真実ちゃん産んだんだよな」

聡実「ちょうど、真由子のお父さんも、受け
持ってる患者さんの手術があつたみたい
だからね」

と、聡実の携帯電話が鳴る。

気づくが、電話に出ない聡実。

和哉「出なくて良いのか？」

聡実「うん」

まだ鳴り続けている携帯。

聡実、携帯電話を切る。

和哉「良いのか？」

聡実「どうせ、大した用事じゃないんだから」

和哉「あいつらか？」

聡実「……」

和哉「まさかとは思ったけど……聡実……」

聡実「(あわてて) 何でもないよッ」

和哉「……」

聡実「何でも……ないんだから……」

和哉「聡実」

聡実「……？」

和哉「無理だけはするなよ」

聡実「うん……(と作り笑いをする)」

難しい顔の和哉。

28 同・和哉の部屋

本棚に、参考書や辞書などが隙間なく敷き詰められている。

壁際のツインベッドで、寝転がっている和哉。

その脳裏に、淑子の声がよみがえる。

淑子の声「和哉は、大事な後継者だから、人の道に外れるようなことだけはしてほしくないの。だから、友達付き合いも考えるのね。もう子どもじゃないんだから」

和哉「……」

と、インターホンの音が聞こえる。

起き上がる和哉。

29 同・玄関

春樹、利枝子、亮が来ており、和哉の返答を待っている。

と、和哉の声を返す。

和哉の声「はい？」

春樹「(インターホンに) 春樹が来たよ」

利枝子「(同時に) 利枝子もいるよ」

亮「(同時に) 亮もいるぞ」

30 総合病院・病室

聡実が、真由子の服をたたんだりして、荷物の整理をしている。

と、ノック音がする。

聡実「はい、どうぞ」

と、ドアが開き、浩輔が入ってくる。

聡実「(振り向いて) 浩輔、どうしたの？」

浩輔「今日、真由子の退院祝いするだろ。病

院のほうは聡実一人だって聞いたから、手

伝おうかなと思って」

聡実「ありがとう、助かる」

浩輔「何から手伝えば良い？」

31 マンション・高崎家・玄関

出かける支度をした倫子が、周囲を警戒しながら出てくると、部屋の鍵を閉

める。

と、背後に気配を感じる倫子。

振り返ると、優一が立っている。

動揺する倫子。

優一「どこ行くんだ？」

倫子「……ちよつと、そこまで」

優一「どこだよ」

倫子「……」

優一「おい」

倫子「……ちよつと、友達のところまで出かけてくる」

と、小走りで去っていく。

その後ろ姿を、冷たい視線で見送る優一。

32 牧家・和哉の部屋

和哉に伴われ、聡実、浩輔、産まれたばかりの真実（0）を抱きかかえた真由子が入ってくる。

笑顔で見迎える春樹、利枝子、亮。

和哉「(真由子に)そこで寝かせれば良いから(とツイインベッドを指さす)」

真由子「ありがとう」

利枝子「赤ちゃん用ベッドじゃないから、落ちないようにはちゃんと見とかないとね」

春樹「そうだよ。産まれてからが大事なんだから、真由子も頑張らないとね」

真由子「うん、これからは真実を育てるために、死ぬ気で母親やるよ」

亮「その意気だぞ、真由子」

和哉「(春樹たちに)なあ、倫子来た？」

春樹「まだ。何の連絡もないんだよ」

利枝子「何やってるんだろうね」

と、インターホンが鳴る。

和哉「来たな」

と、勢いよく出ていく。

33 同・玄関

倫子が立っている。

と、ドアが開き、和哉が顔を出す。

倫子「ごめんね、遅くなって」

和哉「いや、さつきちようど真由子たちが来たところだから」

倫子「良かったあ」

和哉「さ、早くあがって」

倫子「うん。お邪魔します」

と、入っていく。

34 同・和哉の部屋

春樹たち八人が顔をそろえ、ジュースで乾杯をする。

一同「カンパ〜イ！」

と、それぞれにジュースを飲む。

真由子「ありがとう、みんな。心配かけたけど、無事に真実も産まれて、私もこの通り、元気になって退院しました」

拍手をする一同。

それぞれに、テーブルに置いてある寿司桶の寿司を食べていく。

春樹「本当に良かった。もう、半年前のこと

なんて忘れたよ（と笑う）」

真由子「私はちゃんと覚えてるよ。でも、あのときの春樹みたいに、反対する人がいたから、私も挑戦的になって、是が非でも真実を産んで、母親になろうって決めただもん。春樹には感謝してる。半年間の確執も無駄じゃなかったね（と笑う）」

春樹「この間も言ったけど、今は本当に良かったって思ってるんだからね。それに、一番感謝する相手は聡実でしょ。真実ちゃんの名前も、聡実からあやかってるんだから。今、こうして真由子が幸せに真実ちゃんを産んで、母親になれたのも、聡実のおかげだもんね」

聡実「私は、当たり前のことを言っただけだよ。感謝されたくて、言ったんじゃないんだから」

真由子「それはわかってる。でも、真実を産むって決めたとき、何の躊躇もなく聡実は賛成してくれたし、真実を産んだときも、

その日学校帰りに病院に寄ってくれたの。
私の中で、聡実は一生涯感謝してもしきれない相手なの」

聡実「そうやって言ってもらえると、なんだか嬉しいなあ（と笑う）」

浩輔「真由子は、これから母親として頑張つていくんだもんな。俺も負けてられないよ」
和哉「やっぱり、工場で働きながら、定時制に通うのは大変だろ？」

浩輔「まあな。日中散々働いて、夜に学校だろ。もう眠たくて眠たくて。でも、自分で決めた道だから、後悔してないけどな。周りに何言われようが、俺は俺なりに自分の人生生きてくから」

亮「かっこいいなあ。俺も、こんなセリフ言ってみてえよ」

春樹「十三回連続遅刻っていう新記録作った人には、夢のまた夢でしか言えないことだと思っけどね」

亮「ほお、春樹も言うときは言うんだな」

春樹「それが悔しかったら、教室に一番乗りするぐらいな気持ちにならないとね」

亮「松野と同じこと言うんだから」

聡実「松野って、亮君たちの担任の先生？」

利枝子「うん。まだ三十一の若い先生だけど、熱血感あふれる面白い先生だよ。進学向けの聡実たちの高校には、多分そんな人いないと思うけど（と苦笑する）」

和哉「まあ、俺たちの学校にはそういうタイプの先生いらないかなあ。いつも模試ばかりで疲れるんだよ。教員たちも真面目に授業やっておしまいのつまらない先生ばかりだからさ、春樹たちの学校が羨ましいよ、そんな先生がいて」

春樹「まあ、俺たちは勉強するよりも、スクーリングを楽しむことが最優先だからね」

利枝子「二年A組のクラス委員がそんなこと言っちゃって良いの？」

春樹「どうせみんなそう思ってるでしょ。利

枝子だって」

利枝子「まあね」

春樹「ほら」

浩輔「春樹には、何もかもお見通しみたいだね」

春樹「そのようで」

真由子「でも、十三回連続で遅刻ってすごいよね」

和哉「あ、でも、中学校の時は確か、ちよう

ど一ヶ月、二十三回連続ってあったよな？」

聡実「そういえばあった」

亮「そんなことあったか？」

春樹「思い出した。中学二年の秋だ」

亮「よく覚えてるなあ」

春樹「多分、亮君の中学時代の伝説は、まだいくらでもあると思うけどな」

亮「やめろよ」

笑いあう一同。

利枝子と亮が歩いている。

利枝子「今日は楽しかったねえ。八人全員が顔を揃えたのって、真由子の妊娠の話し合いをしたとき以来だもんね。春樹は、真由子と距離置いてたし、聡実も和哉も、高校の勉強が忙しかったりで、ゆっくり遊べなかったもんね」

亮「確かにな。真由子とのこともあって、どうなるかと思っただけど、ちゃんと春樹と和解できて良かったよ。やっぱり、ちよつと恥ずかしかったんだよ、春樹は真由子に会うのが」

利枝子「そうかもね」

亮「見舞いも何にもしないって言っちゃった以上、あとには引き返せなかったんだよね。そう思うと、春樹も真由子も、半年間もつたいないような気がするなあ」

利枝子「けど、二人とも半年間の確執があったとは思えなかったけどね」

亮「それが、友情つてもんだよ。どんなに離

れてても、俺たち八人はちゃんと繋がって
るんだから」

利枝子「たまには亮君も、良いこと言うじゃ
ん。遅刻ばっかで、頭働いてないと思って
たけど（と笑う）」

亮「利枝子！」

プツと鼻で笑う利枝子。

亮も笑っている。

36 公園（夕方）

春樹と倫子が、ブランコに乗っている。

春樹「俺、バイト始めたんだ」

倫子「へえ、どこの？」

春樹「学校の近くに最近できた、『エテ・プ
ランタン』っていう喫茶店」

倫子「そうなんだ。でも、喫茶店だったら、
春樹、似合いそう」

春樹「倫子は、働かないの？」

倫子「え？」

春樹「だって、一日中家にいたって退屈でし

よ。子どももいないから、主婦業だってやることは限られてるし、正社員としてどっかで働いたり、アルバイトしたりするのも良いんじゃないの？ いくら結婚して高崎倫子になったからって、本来の竹中倫子の姿も見せないよ。人生無駄にしちゃうよ」

倫子「私は、今の生活に十分満足してるの。家のことをするのが、私の務めだと思ってるの。家にいて、夫の世話をするのが、私の生きがいだから」

春樹「まあ、倫子がそれで良いなら、俺は何も言わないけどね。ただ、何も夫の世話をすることだけが生きがいじゃないでしょ。自分の好きなことしないと、今に旦那さんの言いなりになっちゃうよ」

倫子「……」

春樹「俺たち、まだ若いから、人生これからだけどさ、今しかできないこともあると思う。だから、倫子にも今の生活を思いっきり楽しんでほしい」

微笑む倫子。

春樹も、微笑んでうなづく。

37 マンション・表

倫子がやってくる——見上げて、高崎
家のベランダを見つめる。

× × ×

へフラツシユ

公園での春樹。

春樹「俺たち、まだ若いから、人生これから
だけどさ、今しかできないこともあると思
う。だから、倫子にも今の生活を思いつき
り楽しんでほしい」

× × ×

倫子、とても険しい顔をして、中に入
っていく。

38 スーパーマーケット

春樹が、カートを引いて買い物をして
いる。

惣菜コーナーに来ると、同じ商品を見比べている――量が少なく値段が安いほうをカートに入れる。

39 マンション・高崎家・ダイニング

優一に突き飛ばされる倫子。

優一「ふざけんなよ。人がどんな思いで働いてるか、お前には分かってるのか？ それを、俺の面倒を見るのが嫌だからって、働きたいなんて、お前もうちの店の新入りの店長と一緒にだ。俺を馬鹿にしてるんだろ」
必死で首を横に振る倫子。

優一「だったら、なんでそんなこと言ったんだよ。（と何かに感づいたようで）分かった……あの坊主の差し金か」

必死で首を振る倫子。

優一「そうとしか考えられないだろッ」

と、拳で倫子を殴る――横たわる倫子。

優一、倫子の髪を引っ張り、

優一「俺の気持ち分かるんだったら、家で

家事でもやってろ」

倫子、優一を睨みつける。

優一「なんだよ、その顔。俺を見下してるのか」

倫子「……」

優一「この女あ……」

と、髪から手を放すと、倫子の体を何度も蹴り続ける。

優一『生意気なこととしてすいませんでした』
つて、言えよ。おい、言えよ！ この欠陥品がッ」

少しずつぐつたりしていく倫子。

40 アパート・谷島家・居間（夜）

台所で、夕飯を作っている春樹——時計を見る。

八時を少し過ぎている。

寂しそうな顔の春樹。

41 牧家・和哉の部屋（夜）

カップ麺を持って、和哉が入ってくる
と、勉強机の椅子に座る。

和哉 「いただきます」

と、一人侘しく食べ始める。

42 マンション・高崎家・洗面所

倫子、鏡を見ながら、ハンカチを濡らして、口の血を汚れ落とす――頬に薄く青痣ができており、それを確認すると、スカートを少しめくり、太もにも痣ができているのを確認する。

涙がこみあげてきて、その場にしゃがみこんで、泣き続ける倫子。

43 アパート・谷島家・居間

春樹が、一人でご飯を食べている。

玄関の様子を伺いながら、夏希の帰宅を待っている。

物音が聞こえるが、隣人が帰ってきたようで、残念そうな顔をする春樹。

44 同・全景（翌朝）

45 同・同・居間

春樹が、テーブルに顔を伏せたまま眠っている。

と、ドアが開き、夏希が帰宅する。

夏希、春樹の肩を叩く。

夏希「春樹、春樹」

目を覚ます春樹。

春樹「（あくびをしながら）あ、姉ちゃん、

お帰り。今帰ってきたの？」

夏希「そうだけど、あんた、学校良いの？」

春樹「今何時？」

夏希「（携帯を見て）七時半」

春樹「あッ、そろそろ準備しないと。どうし

よう、時間割も何にもやってない」

と、慌てて支度を始める。

夏希「ねえ、昨日ずっと待ってたの」

春樹「うん」

夏希「私のことは良いから。春樹は学校だつてあるの。寝ないで私の帰り待ってたら、今に体壊すよ。それだけはしてほしくないから」

春樹「分かっている、姉ちゃんには申し訳ないけど、今度からはやめるよ」

夏希「そうしな」

46 中央高校・二年A組教室

春樹が駆け込んで、登校してくる。

春樹「(息を荒らしながら)おはようッ」

見迎える利枝子、亮、亜沙美、剛士、

奈々。

利枝子たち「おはよう」

春樹「何とか間に合った……」

利枝子「てつきり休みかと思っただよ。いつもだったら、この時間にはちゃんと来るし、亮君よりも後に学校に来る人なんて、滅多にいないんだから」

亮「どういう意味だよ」

笑っている利枝子。

春樹「姉ちゃんの帰り待ってたらさ、いつの間にか寝ちゃってて、七時半に起きたんだよ。そっから、朝ご飯食べて、弁当盛り付けたり、いろいろしてたら、遅くなっちゃって……」

亮「七時半に起きて、ギリギリだって思ってるなんてすごいなあ。とても七時半で慌てるなんて、俺には考えられないな」

剛士「まあ、春樹と亮とでは違うからね」

亮「おい」

春樹「まあまあ、そこら辺にしといて（と大きなあくびをする）」

亜沙美「眠いの？」

春樹「まあね。最近、姉ちゃん、朝に帰ってくる人が多いの。派遣とはいえ、若いからこき使われてるみたいだった」

奈々「春樹のお姉さんも大変なんだ。それで春樹もバイト始めて、お互いに助け合って生きてるんだもんね」

春樹「頼れる人がいないから、たった一人の
肉親である姉ちゃんと、二人三脚でやって
いかないよ、生きてけないからね」

奈々「親がいなくてもたくましく育ってる人
がこんな目の前にいるのに、私の弟なんか、
私と口すら聞いてくれないんだから。邪魔
だの、あっちいけだの、好き放題なんだか
ら」

亮「それが普通なのかもしれないな。おかげ
で俺のところも、春樹と一緒に妹と兄妹仲
良くやってるから良いけど」

利枝子「深雪ちゃん、今年中三だったよね。
うちの妹と同じ年だから」

亮「そうだ。深雪、あやめちゃんとクラスが
一緒だって言ってたわ。あいつも受験かあ。
春樹もそうだけど、みんな、そうやってい
ろんなところで頑張ってるんだな」

まだ息が荒くなっている春樹。

春樹が帰宅する。

春樹「ただいま」

と、夏希の会社の社員証が落ちていることに気が付く。

春樹「……………」

春樹、鞆から携帯電話を取り出すと、夏希に電話をかける。

ガイドンスの声「留守番サービスに接続します」

携帯を切る春樹。

再度、電話をかける春樹。

春樹「あ、もしもし。総務部の谷島夏希をお願いします。家族のもんですけど…………え、ちよっ…………どういことですか…………？いつですか、辞めたのは？二ヶ月前…………。そうですか…………いえ、はい…………失礼しました…………」

と、ゆつくりと電話を切ると、重々しくその場に座り込む。

春樹「どういこと…………」

険しい顔の春樹である。

48 キャバクラ・女子更衣室

派手なドレスを着た夏希が化粧をしている。

と、ボーイの声がする。

ボーイの声「ナツキちゃん、ご指名だよ」

夏希「はい、すぐ行きます」

49 同・店内

会社の重役のような中年の男客がそれなりに来ており、それぞれの席でキャバ嬢と酒を飲みあい、楽しんでいる。

ボーイに伴って、夏希がとある席にやってくる。

ボーイ「(客に) お待たせしました」

夏希「ご指名ありがとうございます、ナツキです」

客「待ってたんだよ、さ、一緒に飲もう」

夏希「はい。失礼します」

と、客の隣に座ると、グラスに氷を入
れる。

50 アパート・谷島家・玄関

まだ座り込んでいる春樹——夏希の社
員証を、呆然と見つめている。

脳裏に夏希の声が次々と蘇る。

夏希の声「今日は、多分遅くなる。もしかし
たら、会社で泊まってくるかもしれない」

夏希の声「会社にとって、若者は戦力だから
ね。若いからっていう理由で、重宝されて、
思いつきり働かされるの」

夏希の声「やっとそれなりに仕事が片付いた
から、みんなでちよつと飲んできたの」

激しく落胆したように、頭を抱える春
樹——その顔は、憔悴しきったような
顔である。携帯電話を取り出し、もう
一度電話をかける。

51 キャバクラ・店内

客たちと騒がしく話したり、酒を飲みあっている夏希。

52 同・女子更衣室

夏希のロッカーから、携帯の着信音が鳴っているのが聞こえる。

53 アパート・谷島家・居間

携帯電話を、乱暴に切る春樹——立ち上がると、憤然として、夏希の社員証をゴミ箱に捨てる。

その目には涙が浮かんでおり、がつくりとしゃがみ込む。

つづく